私の教育実践　～教師の言葉と姿～

愛媛県立松山西中等教育学校　校長　佐々木　進

私の生まれ育った南予の小さな島には、当時800人程が暮らし、主な生業であった零細な農業と漁業の他には数軒の小さな縫製所や理美容店、食料雑貨店等がありました。子どもたちは島内の小・中学校（併設）へ通い、１学年10数名の同級生は９年間ほぼ変わらず一緒に島を巣立って行きます。そのような島の学校に着任してくる教師は私にとって、知識だけでなく驚きや面白さ、楽しさをもたらす稀人（まれびと）であり導人（みちびきひと）でした。

小学校４年生だった私が、図画工作の授業で風景を描いていたときのことです。絵の具のチューブから青色をパレットに出し、それをそのまま下絵の空の部分に塗ろうとしました。すると、そばにおられた先生が私に、「空はその青色かなぁ。よく見てごらん」と言われたのです。改めて空を見上げると、絵の具の青色ではなく、くすんだ白や紫がかった青などが絶妙に溶け合い、グラデーションを成している様子が目の前に広がっていました。そのとき初めて、空を美しいと思いました。また、ある先生が御家族と一緒に着任してこられ、島の５・６年生が市内の小学生陸上競技大会に出場するようになりました。先生は、私たちの体格や能力、特性に応じて種目を決められ、一人ひとり指導してくださいました。ある日、私たちを学校から３㎞程の人里離れた場所まで連れて歩かれ、島内で最も長い直線道で 100m走のタイムを計られました。学校の運動場では50m走までしか計測できなかったのです。夏休みの練習後、疲れた私たちに先生が買ってくださった「アイス」の美味しさは忘れられません。中学校でも出会いがありました。１年生になってすぐの頃、職員室の学年別出欠席黒板に当日の結果を書いていた私は、４月に新しく着任された数学の先生から、「丸ではなく、零を書きなさい」と書き順を示されながら指導されました。該当者なしの意を縦長の丸印で示していた私は、数の零で表記しなくてならないことに改めて気付かされ、数値化することに不思議な清々しさを感じました。

私は、これまでに出会った多くの先生方から、気付いたり知ったりすること、すなわち「学ぶこと」の楽しさを教わりました。そして、正しさ・善さ・美しさ・尊さを願い求めることによって人生は豊かになるということを学びました。大学卒業後、愛媛の高校教員となる道を選んだのは、そのような先生方の生き方に魅かれたからです。しかし、初めの頃は失敗も多く、生徒たちを楽しい学校生活や豊かな学びに導くことができませんでした。

教員になって初めてクラス担任をしたときのことです。ホームルーム委員は、私の依頼や指示に真面目に応えてくれる女子生徒でした。笑顔を絶やさないその生徒の細やかな気遣いと丁寧な仕事ぶりに、随分と助けられました。５月の下旬、家庭訪問週間にその生徒のお宅へ伺い、母親と懇談をしました。私は生徒の献身的な活躍を伝え、褒め上げました。すると母親は、「疲れているのか、毎日学校から帰るとすぐ横になります」と教えてくれたのです。私は言葉を失いました。期待に応える喜びと多忙ゆえの辛さとの板挟みで苦しんでいることに気付けなかったのです。しかも、感謝と労いの言葉が彼女を追い詰めていたことにも無自覚でした。それからは、生徒への接し方や教員としての在り方を意識するようになりました。

また、ある新聞記事を読み、「今まで何を生徒たちに伝えてきたのか」という猛省に迫られました。記事の内容は、胎児性水俣病患者である女性を湯船で抱きかかえる母親の慈愛に満ちた表情をとらえた有名なモノクロ写真を、「もう休ませてあげたい」という患者の両親の申し出によって、写真の著作権者が今後の出版物に掲載しないことを確約していた、というものでした。裸の我が子を見るたび「着物を着せてやりたい」とふびんでならなかったが「公害撲滅に役立つなら」と抑えてきたものの、水俣病展のビラの表紙にも使われ「風雨にさらされてはあまりに可愛そう」という父親の談話が載せられていました。私は、教材に掲載されていた同写真を使って授業をしたことがありました。しかしそれは、患者の女性や両親の気持ちを想像するものではなく、ましてや、彼らの気持ちに関心をもたない鈍感さが、公害を生みだしたものと同根であることを気付かせる授業ではありませんでした。以来、生徒に何を教えるかを深く考えるようになりました。

私はこれまで、生徒たちの成長を促す教育活動を行うことを楽しみ、成果を生徒たちと一緒に喜び合ってきました。その中で、子どもに「学ぶことは楽しい」という実感を持たせ、真・善・美・聖の価値観の種をまき、それを子ども自らが培うのを支えることが教育に期待されている役割の一つだと思うようになりました。その上で、子どもたちが将来、唯一無二・オンリーワンとしての自分と、同じくオンリーワンである全ての人たちの中の一人・ワンオブゼムとしての自分、その両方のバランスを保ちながら、暮らしの中で喜びや楽しみを味わい、悲しみや辛さを抱えながらたくましく生きていけるように育てる。これが教師の使命だと考えています。そのために子どもの心を深いところで揺さぶり続ける言葉を届け、姿を見せる、これが私の目標でした。